

はじめに

本報告書では千葉大学大学院人文社会科学科後期課程研究プロジェクト「接触場面の変容と言語管理」(2009年)の一年の成果をまとめた。これまで刊行されてきた「接触場面の言語管理研究」のシリーズとしては8冊目にあたる。

本年度は金子信子氏が博士論文『接触場面における書き言葉問題の言語管理』を、そして菊地浩平氏が『手話会話におけるターンテイク・メカニズム』を提出した。金子氏は長く非漢字圏外国人居住者の日本語における書き言葉の問題をこの領域のパイオニアとして扱ってきたが、1つの大きなまとめとなったと思われる。また、菊地氏も手話の会話研究をすすめる先頭集団の一人として成果を出し、出発点に立ったのではないかと評価される。お二人には各分野の展望並びに理論的枠組について執筆してもらった。両氏の今後の活躍を期待したい。

グローバル化の急速な進展は接触場面の多様化を拡大させているだけでなく、そこに参加する当事者たちの言語管理にも質的な変化を生じさせている。日本という場においてはとくに外国人の側にそうした変化が見られるが、その結果として日本社会における接触場面もまた変容する、つまり過渡的 (transitioning) な様相を示しているように思われる。本報告書では学外からは石田氏が、学内では高氏、そしてプロジェクト代表者の村岡がこうした接触場面の変容を研究する視点を研究ノートというかたちで追求した。予備的な考察ではあるが、今後の研究にむけて重要な論点が提出されたものと考えている。

調査論文としては4本を掲載することが出来た。今では韓国人日本語話者のインタビュー場面における表示の管理 (management of presentation) を Goffman の footing の概念をもとに取り上げ、韓国人が行う「非母語話者」以外の役割の構築を追求している。王では中国人日本語非母語話者の人称詞の選択にかかわる社会的・心理的要因から、会話相手との距離の生成のありかたを分析した。楊では実際の職場や教育領域における不一致応答の事例から、中国人居住者が社会的位置、職位およびポジティブ・フェイスという社会的、場面的要因から応答の仕方を選択していることを分析した。最後に鄒は修士論文をまとめ、会話における中国人日本語上級話者のターン開始表現の要素を分析し、それらが先行発話に対する感情を示す場合と次発話の方向性を示す場合とがあることを明らかにした。4本ともディスコースに基盤を置く詳細な分析から接触場面の諸相を追求するものであり、今後の展開が望まれる。

また、金は研究ノートとして日本語教室内における学習ストラテジーを4つの局面から分析可能であることを示している。

報告書の最後には2008年10月から2009年9月までの「言語管理研究会」の活動報告を載せた。言語管理研究会はもともと千葉大学大学院社会文化科学科の研究プロジェクトの一環として発足したが、その後、研究会として独立した学術活動を行っている。当プロジェクトのメンバーも、プロジェクトの重要な活動の一部として研究会の運営に参加している。また、今年度は院生の協力のもと言語管理研究会ホームページ (<http://www2.atword.jp/language/management/>) に接触場面並びに言語管理研究の文献リストの更新を行った。この場を借りてお礼を申し上げたい。

さまざまな立場の方々との学際的な協力関係が望まれる。皆様のご指導を仰ぐ次第である。

なお、本研究プロジェクト報告書からの部分的な引用に関しては、すでに著者の了解が得られています。

2010年2月26日

研究プロジェクト代表

村岡英裕